

高齢者の機能低下を最低限にするための看護連携システムの構築

角濱春美¹⁾、松島正起²⁾³⁾、村上純子²⁾、川野恵智子⁴⁾、柗谷京子⁵⁾、田中雪子⁶⁾、
松浦由美子⁷⁾

1) 青森県立保健大学健康科学部・健康科学研究科、

2) 青森県立保健大学健康科学研究科博士後期課程、3) 青森中央学院大学看護学部

4) 八戸市立市民病院、5) 医療法人平成会八戸平和病院、

6) 財団医療法人謙昌会総合リハビリ美保野病院、

7) 公益財団法人シルバーリハビリテーション協会メディカルコート八戸西病院

Key Words ①地域包括ケア ③看護情報 ④サマリー

I. はじめに

現在の日本の地域包括ケアシステム、これに付随する地域医療構想では、疾病が発症して回復し自宅に退院するまで、複数の病院や施設を経由する。それぞれの病院や施設が役割を分担することによって、高度で効率的な医療提供が可能になるという利点がある。しかし、特に高齢者では、病院、施設、在宅を行き来するうちに、日常生活機能が低下する事例が散見される。この課題を解消し、地域包括ケアシステムを有効に運用するためには、それぞれの施設間の連携が重要であると考えられる。本研究では、青森県八戸市地区の主たる病院看護部とともに、看護と看護の連携にどのような課題があるか、課題の解決方法として何が提案できるかを検討した。平成 29 年度に連携施設を知るための見学人事交流を行った。平成 30 年度はその体験を通して考えた連携の課題を抽出した。更に、情報の流れに注目し、看護サマリーの試案を作成したため、報告する。

II. 目的

本研究の目的は、高齢者の機能低下を最低限にするための看護連携システムを構築することである。平成 30 年度は、①施設間人事交流事業後のインタビュー調査から課題を抽出すること、②必要十分な情報を含むサマリーの試案を作成すること、を目的とした。

III. 研究方法

1. 看護連携の課題の抽出

対象：連携施設間見学人事交流に参加した看護師 83 名のうち、施設混合でのインタビューに同意した 33 名

データ収集方法：フォーカスグループインタビュー法により、データ収集を行った。インタビュー内容は、①見学交流でどこに行き、何を感じたか、②他施設に確認したいこと、③今後の施設間連携でどのようなことが課題か、④重点的に取り組むべき連携課題は何か、とした。

分析方法：インタビュー内容を逐語録にし、内容分析の手法を用いて分析した。

倫理的配慮：青森県立保健大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号 1740）。

2. サマリー試案の作成

連絡先：青森県立保健大学 〒030-8505 青森市浜館字間瀬 58-1

Email h_kadohama@auhw.ac.jp

データ収集・分析方法：研究参加施設の看護サマリーの記載内容を表にまとめ、内容を比較した。この結果をもとに、研究参加施設のうち1名以上が参加できるグループを作成し、ブレインストーミングを行った。討議内容は①サマリーの問題点について、②サマリー情報の比較から考えるより良いサマリーの提案、とした。

IV. 結果

1. 看護連携の課題

看護連携の課題としては、【地域医療構想の住民への周知】、【制度に乗るための手続き】、【制度の違いによる施設間連携の困難】、【多職種連携】、【地域連携パスの推進】、【医療処置とその後の生活のインフォームドコンセント】、【必要十分な情報の伝達】、【ケアの共有・統一化】という8カテゴリーが抽出された。

2. サマリー試案の作成

看護サマリーを比較したところ、感染症やアレルギー、医療機器の使用状況はいずれの病院でも記載欄が充実していた。看護情報はADLの現状が主であり、病気の受け止め等の認識や精神面についての記述が少なく、看護問題が記載されていない病院もあった。ブレインストーミングでは、①行っている看護、病気に対する受け止めや家族の状況についての記載の必要性、②食事や栄養、薬剤に関して情報解釈の誤りが生じている現状、③患者の性向やトラブルに陥りやすい点は必要な情報であること、が指摘された。これらの課題を解消するため、以下の点に留意してサマリーの試案を作成した。①管理栄養士や薬剤師のサマリー作成への関与を促すこと、②病気に対する説明と受け止めの記載欄を設ける、③生活状況は、現在だけでなく特筆すべき経過と有効な看護を記載できるようにする、④伝達したい点や看護師の思いを記載できる欄を設ける。

V. 考察

看護連携の課題として、地域医療構想や医療・保健システムとの関係では、【制度に乗るための手続き】、医療費や、薬剤、機材に関わる課題【制度の違いによる施設間連携の困難】が指摘された。【地域医療構想の住民への周知】が必要であるとの提案がされた。医療について住民が理解できることで、地域の安心感も増し、病院の負担も軽減するであろう。【医療処置のその後の生活のインフォームドコンセント】は、看護師のもつ「生活実態」に関わる情報は、患者の意思決定過程に必要不可欠なものとして位置付け、情報提供を促す必要があると考えられた。【必要十分な情報の伝達】、【ケアの共有・統一化】は、看護実践に関する課題であり、専門職として取り組む必要性が高いと考えられた。

サマリーについても他職種連携の課題が出された。今後作成されたサマリーの試案を用いて、その有用性を検討する必要があると考える。

VI. 発表（誌上発表、学会発表）

松島正起、角濱春美、他：ようこそ！保健大学研究室～重点課題研究発表会～高齢者の機能低下を最低限にするための看護連携システムの構築，保健医療福祉研究発表会,2018.12